（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　井上まどか

井上まどか氏の「ロシア〈帝国〉の宗教と政治――帝政期から現代まで」は、現代ロシアの政教関係の変容を記述するとともに、その制度史的、思想史的背景を帝政期にまで遡って考察し、さらに現代世界の政教関係論の動向に照らして理解しようとする試みである。

井上氏は第１部の「制度論」で１９９０年代以降のロシア連邦の宗教制度の展開をたどり、その意味を説き明かす。ソビエト連邦崩壊後、信教の自由が掲げられるが、やがて国外や新興の宗教勢力の影響を抑え、実質的に正教会の地位を高めるための政策が採用されていく。２００２年の「ロシア連邦における伝統的宗教組織について」の法案や０３年の「国家と宗教組織の社会的パートナーシップについて」の法案は、国教制度や公認宗教制度への接近を明快に表現している。また、学校での「正教文化の基礎」等の教科の導入は、国家と「伝統的宗教組織」の協力関係の進展をよく表すものである。１９９０年の「信仰告白の自由」法は、世俗主義の政教分離規範に沿うかに見えた。だがその後、国民国家的な世俗主義理念は「擬態」化されていく。多様な「伝統宗教」を包含し、それぞれに一定の地位を与える統治の方式は、むしろ帝政期の宗教施策に通じるものがある。この観点から、井上氏は俗人による宗務院制度を構築したピョートル一世治世下（１６８９－１７２５）の「世俗化」政策や、ニコライ一世治世下（１８２５－５５）のナショナリズムの言説状況において、正教会に大きな政治的役割が負わされていった経緯を再考している。

第２部の「思想論」では、１９９０年代以降の宗教的「愛国主義」と１８４０年代のナショナリズム台頭期の教会論を照らし合わせ、国家と宗教を関係づけるロシア的な言説の特徴が探究される。９０年代のソルジェニーツィンの政体論では、正教的な美徳を身につけた人々が形作る「小空間の民主主義」と他民族を包摂するロシア人の民族的精神性が論じられる。他方、１８４０年代に著されたホミャコーフの「教会はひとつ」では、多様性を含み込んだ共同性の理念として「ソボールナスチ」が唱えられている。どちらの場合も、国家統合より多様性を許容する自発的な宗教的共同性に希望が託されている。

井上氏は宗教と国家の関係について、帝政期を引き継ぎつつ冷戦後のロシアで制度や思想の模索がなされているとし、国民国家とは異なる〈帝国〉的な伝統の顕在化に関わるものと捉える。そして、ロシアのナショナリズムを公定ナショナリズムと特徴づけたＢ．アンダーソンや西洋をモデルにして宗教復興を論じたＪ．カサノヴァの「公共宗教論」を批判し、Ｍ．フーコーの「統治の技術」論やＴ．アサドの「宗教」概念批判論に依拠し、世俗主義的国民国家を規範とした比較考察からの脱皮を促している。

取り上げられている時間や論題が広がりすぎてまとまりが弱くなっていること、個々の考察素材の掘り下げも足りないことなどの欠点はあるが、比較展望の下にロシアの政教関係の新たな見取り図を提示しようとした野心的な労作である。よって審査委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与するに値するものと判断する。